

私立高等学校の教師としての35年間

鈴木 芳 弘

学校法人 鎌形学園 東京学館高等学校 校長

1. はじめに

2019年のホームカミングディに参加させていただいた折に、私立学校での勤務について学生の皆さんにお伝えする機会を頂戴した。教職志望の学生の皆さんにとって多少なりにも参考になればとの思いからお話しさせていただいた。生徒の前に立つ教師としての心構えなどは公私を問わず同じである。しかし、その勤務形態などは大きく異なることもあり、良い点、悪い点を隠さずお伝えした。この時、学生の皆さんの情熱を持ち教職を目指す姿を拝見する機会も得て、私にとって貴重な経験をさせていただいたと感謝している。

さらに、この度は「北里大学教職課程センター教育研究」への寄稿の機会を与えていただき、重ねて感謝している。私立学校での拙い経験しかない私が寄稿させていただくのは相応しくないのではと大変迷ったが、これまでの自分を振り返ることにより、教職志望の学生の皆さんに些少でもお役に立てればとの思いからお引き受けした。

2. 教師という職を目指すまで

私は15歳の時に腎臓病を患い、長い入院療養を送ることになった。中学校1年の9月1日に入院、翌々年の7月3日に退院、1年10か月もの入院生活を送ることになった。私の入院していた病院には院内学級はなく、病状が落ち着いていても学習するという環境はなかった。最初のうちは、担任の先生が学校での出来事を知らせに来る時に、形ばかりの学習教材が届くといった状態で、病状が落ち着いていても、読書をする程度の状況で、結局、中学校1年の9月から2年の夏休み明けまでに終えるべき学習は、ほぼしないまま、1年留年する形で、2年生の9月より中学校に戻ることになった。当然のことだが、新しいクラスメートは1年後輩、同級生は3年生になっており、違和感ばかりの生活がスタートした。クラスメートとは妙な距離感があり、時たま私を心配してやってくる3年の同級生の悪ふざけなどで、距離感はますます大きくなり、しかも、授業は全く理解できないといった状態だった。殊に英語の授業では、リスニングなどできるわけもなく、何を言っているのかさっぱり

りわからない。竜宮城から現実世界に舞い戻った浦島太郎状態であった。

学校生活では、当時の先生方は私の身体のことには常に気遣ってくれており、今思い返せば感謝しかないが、当時の未熟な私は学業面で見捨てられたように感じており、その反動なのか、斜に構えて、理屈っぽくなり、また良くないことに、定期考査や模試では中位の成績がとれたせいで、真剣に学ぶ姿勢の乏しい、扱いづらい生徒になっていた。当時は「教師は敵」といった身勝手な評価をしており、将来教職に就くなど絶対にないと考えていた。

このような経験から高校受験では上級生のいない新設校のみを受験した。幸いなことに昭和54年当時は生徒急増期の初期であり、首都圏では新設校ラッシュで選択肢は多く、その中でも家から遠く、同じ中学校から入学する者が少ない学校を選択した。その学校が現在勤務する東京学館高等学校であった。

東京学館高等学校の第一期生として入学し、高校生活がスタートした。新設校ということで、教職員の年齢構成に偏りがあり、公立校を退職されたベテランと、新卒の教職員の二グループで構成されていた。生徒も現在のように落ち着いてはおらず、男子校ということもあり、血気盛んで無鉄砲な生徒が多かった。教職員も若く情熱を持った者が多かった時代でもあった。良くも悪くも生徒に対し前向きに向き合う教員が多く、私のような教師に対し反抗的な生徒にも根気強く指導をしていた。

1年次の数学担当のI先生は、温厚でユーモアあふれる方だったが、学業に対する姿勢には厳しく、毎時間、生徒に数学の問題を解く楽しさを力強く語っておられた。その教えを実践すると、確かに数学の問題を解くのが楽しく感じられ、私にとっては初めて教師という存在からプラスの影響を受けたと感じた。その後も数学だけでなく、高校生ともなれば、将来を見据え行動することの大切さなど、より良い物事の捉え方についての学びの機会を与えていただいた。ここで大きかったのは、教科の学習以外では、I先生からは「～しなさい」という指導を受けた記憶がなく、「あなたは何をしたいのか」と、常に問いかけてくる指導であったということである。最初は鬱陶しいと思っていたのだが、多方向から考え、自分の意見をまとめ上げることの大切さを学ぶことができた。東京学館高等学校の教育方針が「自主・自学」であり、先生は日常の指導の中で、教育方針に則った指導を実践されていたのだと、自らが教師になってから気づかされた。後述するが、私立学校における教育は、創立者から受け継がれた建学の精神に基づいた教育を実践し、社会貢献できる人物を育成することが使命である。

このような経験により、中学校時代の「教師は敵」から「教師という仕事も悪くない」に考えが大きく変化した。これもこの学校に入学したからこそその結果であり、今思えば、この経験がなければ教師として人生を歩むこともなかったと思う。まさに偶然的な人との出会いが、その後の生き方に大きく影響を与えるということを強く感じるとともに、教師という職の重要性なども意識するようになった。

このような考えを持ち始めると、なぜか学校生活も楽しく感じられるようになり、部活

動も吹奏楽部に参加し、放課後は打楽器の練習に明け暮れ、さらに日々の学習にも積極的に取り組むようになった。大学進学にあたっては、得意な化学や生物を学びたいと考え、最終的に北里大学衛生学部化学科に入学することになった。

大学では興味のある化学に関する授業がほとんどで、学ぶことが楽しいものであることに気付かされた。入学直後の履修登録で教職課程をとるか迷いはあったが、高校時代に「教師という仕事も悪くない」と思ったこともあり、とりあえず履修することにした。今思えば、この時、高校時代の経験がなければ絶対に履修しなかったであろう。しかし、いざ授業が始まると1年次の月曜日から金曜日までは教養課程の授業と専門課程の授業がぎっしり詰め込まれているので、教職課程の授業は土曜日の朝から夕までに集中しており、さらに、地学の授業などは夏季休業中に集中して実施され、夏休みもお盆の期間中くらいしかないといった状況で、高校時代よりも過密なスケジュールになっていた。当然、途中でリタイアする者も相当数おり、衛生学部では、1年次に教職の履修登録をした者が100名程度いたが、卒業時に免許を取得した者は、半数程度ではなかったかと記憶している。

その後も充実した学生生活を送ることができた。大学3年の初め頃に就職について真剣に考え始めた。それまでは漠然と化学系の企業に就職するつもりでいたが、実際に卒業後の就職した姿を想像すると、どうもはっきりとしたイメージが浮かばない。自分が大学で学んだ化学を基にどのような道に進めば、自らを高めながら社会貢献できるのかを考えるうちに、理科の教師という選択肢があることに気付いた。その後も悩みはしたが、大学3年の中盤には教師になることを決心した。

3. 私立学校への就職

無事に大学4年に進級し、ゼミに配属され卒業研究を始めることになるのだが、ここでちょっとしたハプニングがあった。私は生物化学教室を第一希望にしていたのだが、第二希望の物理化学教室に配属されることになってしまった。当時の物理化学教室の村松三男教授は個性的な方で、専門の界面化学の指導だけでなく、日ごろの生活や身だしなみについても大変厳しく指導されていた。当時の日本経済はバブル期で、日本全体が浮かれている時代でもあり、今考えれば、学生は、その身であるにも関わらず贅沢な振る舞いをしていた頃である。そのような姿を正すべく厳しく指導されていたのだろうが、原書講読の時間に日本語訳に手間取っていたところ、「時間を無駄にするな」と言い終わると同時に頬を殴られる、髪の毛が長いと言われ、ハサミで切られるといったこともあった。しかし、私が一番困ったのは、村松教授は口癖のように「教師にはなってはいけない。教師は嘘つきばかりだ。」とっておられたことだ。教師を目指し始めた私にとって大きな壁になることになった。

卒業研究は神奈川大学工学部の田嶋和夫教授の指導を受けることが決まり、土曜日の原書講読以外は神奈川大学に通うことになった。田嶋先生は温厚で面倒見の良い方で、私の

就職についても快く話を聞いていただけた。「村松先生の教師嫌いは昔からだからね。でも君は教師に向いていると思うよ。」と、励ましの言葉をいただき、前向きな気持ちが湧いてきたのを覚えている。いよいよ、教育実習が始まる直前に、村松先生に教育実習で原書講読の講義を2回にわたって欠席する旨申し出たところ、長時間のお説教の後、最後は「勝手にしろ」と許可（と判断した・・・）をいただき、無事に教育実習を終えることができた。しかし、教育実習を終えてからの原書講読の時間は大変だった。村松先生は私を完全無視されるようになり、精神的につらい時間になったが、これも仕方のないことだと半ばあきらめると、今度は教員採用試験に向けた準備に力が入るようになっていった。しかし、教員採用試験は公立、私立とも不合格となり、翌年の採用試験を目指すことに決め、それまで遅れていた卒業研究に力を注いだ。無事に卒業が決まり教員免許も取得できることになって、卒業式を待つだけになった3月の初めに、高校時代の担任から理科に空きができたので、明日までに返事をするようにとの連絡があった。非常勤講師としての採用だが、翌年の採用試験を目指すのであれば、非常勤として勤務する方がよいと判断し、承諾の返事をして現在勤務する学校法人 鎌形学園 東京学館高等学校に入職することになった。

卒業式の数日前に物理化学教室の卒業を祝う会があり、そこで思いがけない出来事があった。宴会も終盤になり、かなりお酒も入った頃に村松先生に隣に来るよう呼ばれた。今まで無視され続けていたので、最後のお説教かと思いきや嫌々ながら行くと、小さな声で「私が何で教師にはなるなと言ったか教えてやる。北里大からは教師になるのは限りなく難しい、努力してもなれないならば、それは無駄な努力になる。最初から違う道を進むべきだ。それと、高校の教師になってからは勉強しないやつがたくさんいる。高校の教科書には嘘が書いてある。未来を託す子供たちに嘘を教えることは許しがたい。しかし、お前は非常勤だが採用試験に合格した。教師は人を教える素晴らしい職業だ。だから嘘を教える教師にだけはなるな。最低でも教師を続けるうちは、人としての生き方と化学を学び続ける。」とおっしゃった。確かに部分的には極端な考え方だが、自然科学は日々発展しており、昨日までは正しいと考えられていたことが覆されることは当たり前にある。将来ある子供たちを導くには、常に正しい知識を持つことは最低条件である。学び続けるから教師として子供たちの前に立つことが許されるのだ。今までの理不尽とも感じていた先生の指導方法は、先生なりの教師としての信念の下でのことであったのだと理解すると同時に、教師を職にする者の大切な心構えを教えて頂くことになった。この教えから、今でも生徒たちに「不可能と極めて困難は違う。不可能な努力は無駄になるから意味がない、でも極めて困難なことに挑戦する努力は絶対に惜しむな。」と事あるごとに話している。このように村松先生、田嶋先生、高校時代の恩師など、多くの師との出会いに感謝すると共に、いまでも諸先生方から授けられた教えを大切に日々過ごしている。

4. 教師としての最初の10年間

昭和61年3月無事に北里大学を卒業し、4月1日に東京学館高等学校で教員としての生活が始まった。非常勤講師としての採用だが、当時は非常勤といってもフルタイムで働かされるのが当たり前の時代だった。朝は7時45分には出勤し、退勤は20時過ぎることが多く、日によっては22時に学校を出るような時もあり、「働き方改革」が議論される今では考えられないような勤務実態だった。初年度は、授業時数が化学、生物で合わせて18コマ、1学年副担任、生徒指導部に配属された。生徒指導部では美化活動担当となり、同期の新任者と一緒になって清掃用具の管理や大掃除の計画などを立てるのだが、これだけではなく、放課後は生徒の落書きを消すためにペンキを塗ったり、廊下にワックスをかけたりするなどの作業を命じられる事もあった。

当時の東京学館高等学校は、全日制男子校で1学年の学則定員が600名（普通科500名、体育科100名）、実際に入学してくる生徒は全体で650名程度、全校で約2,000名在籍しており、1クラスに53名という状態で、机間巡視ができなくなるほどの生徒が教室にいるような状況だった。授業中も落ち着いてしっかりと授業を受ける者と教科の学習には全く興味を示さない者、そもそも学校を休んでばかりいる者等、様々な生徒がおり、毎日の授業にも多くの工夫が必要だった。それでも理系進学コースの生徒は、理科全般に対して興味を持っているので集中して授業を受けていたが、体育科では化学に対して興味を持たせ、前を向かせることから始めなければ授業が成立しないような状態であった。授業の最初に演示実験をする、文章ではなく、なるべく図や写真を使って視覚に訴えかける、授業の終わりにその時間のまとめとして小テストを実施して、合格点をとるまで下校させない等々、工夫を重ねるのだがどうも上手くはいかない。毎日が戦いのような状態だった。今はICT教育が進み、生徒全員がiPadを持っており、授業の導入部でクイズ形式の教材を作り楽しく競わせたり、動画教材を多用したりなど新しい試みができるようになった。当時にこのようなツールがあれば工夫の幅も広がっていたであろう。

2年目には専任教諭に任用され、初めての担任を持つことになり、新鮮な気持ちで4月を迎えたのを覚えている。担任を持つと生徒との距離も近くなると同時に、生徒の生活面や家庭での出来事などにも目を配る必要が出てくる。今までにも増して生徒一人ひとりとのコミュニケーションが重要になる。表面的には反抗ばかりしている生徒が、家庭では抑圧され続けている事などはよくあることだ。生徒と向き合うことの大切さと難しさ、保護者からの信頼を得ることの重要性などを学んだのも最初の10年間であった。

3年目には生徒指導部から教務部に移り、以降23年間教務部で教育課程の編成、教員研修、授業改善に携わることになる。また、吹奏楽部の顧問にも任命された。高校時代、私自身が吹奏楽部でパーカッションを担当していたので、部活顧問をやるならば吹奏楽部を考えていた。私が高校生の頃には15名の部員がいたのだが、私が顧問になった時には部

員7名しかおらず、どうなるのか不安であったが、部員一人ひとりのモチベーションが高く、練習に対しても熱心に取り組んでいたので充実した活動ができた。平成7年の共学化により女子生徒が入学するまでは、10名程度の部員で推移していたが、アンサンブルコンテストに出場するなど、積極的に活動する場面を増やしていった。この頃在籍していた生徒とは今でも連絡を取り合っており、昨年来の感染症の影響が出る前までは、1年に一度くらいは皆で集まり、近況報告や思い出話で盛り上がった。また、高校で初めて楽器に触れた者も多くいたが、40歳半ばになった今でも市民オーケストラなどで演奏活動を続けている者もいて、音楽の素晴らしさと、学校における部活動などの課外活動の大切さを感じる。

このように最初の10年間で本当に多くのことを学ぶことができた。

5. 中堅教員としての10年

平成8年の3月に校長より教務部長補佐への内示があった。まだ担任として生徒と向き合うことに魅力を感じていたこともあり固辞したが、最後は業務命令なので受けるようにと説得され受けることになった。この頃から少子化による生徒減少による影響が出始めており、その対策として平成7年に男女共学化に踏み切った。私立学校が募集定員を満たすことを考えた場合、共学化するのは当然のことなのだが、女子生徒を迎えるには十分な準備が必要だった。施設の改修や、系列の共学校から経験豊富な教員が教頭として赴任してくるなどの対策はとっていたが、校内で女子生徒を受け入れる準備、特に教職員に対する研修等は遅々として進まない中で、共学化がスタートしていった。女子生徒の指導に不慣れな教職員ばかりで、案の定、生活面での指導が不十分になり校内が落ち着かない状況になるなど、対策を急がなければならなくなった。これを機会に学校全体を見渡した改革が必要ということになり、その改革推進の中心として、校長直轄の「研修・企画委員会」が発足し、教務部長補佐の私もメンバーになった。

時期を同じに、外部の教育コンサルが企画する「中堅教員研修会」に、法人より系列各校（鎌形学園は東京学館高等学校、東京学館浦安高等学校、東京学館新潟高等学校、東京学館船橋高等学校の4校を運営）2名ずつ派遣され、私も選ばれ参加の機会を得た。この研修では問題解決へのプロセス、数値目標と評価法などを中心に学び、新たな知識を得ることができた。これまでの学校では生徒に対する数値目標はあったが、教職員の業務に関する数値目標はほぼなかった。この研修で日々の業務に対する数値目標の大切さと、PDCAサイクルを取り入れた業務の適正化をおこない、学校全体の改革が必要であると強く感じた。そして、この研修を受けた教職員が中心となって、先の「研修・企画委員会」が組織されることになった。

最初に取り組んだのは、全教職員の参加を義務付けた研修の開催であった。最初に「他の学校を知る」をテーマにして、法人内で早くから学校改革に着手し、実績を重ねていた

新潟校の校長に依頼し、「教職員の意識改革の重要性」を演題として講演していただいた。学校改革において最も大切なのは、教職員が同じ意識を持ち業務を企画、遂行すること、職人集団ではなく協働していることを意識することを強調した講演だった。これらを意識しながら学校改革に成功した新潟校は良き手本となり、後日、中堅教員の数名が新潟校を訪れ、日常の授業、放課後の課外授業や部活動等の課外活動を見学し参考にした。その後、本校の状況を考慮した上で、最初は教務部での業務内容見直しに着手し、次第に他の分掌でも同様の改善を進めていくことになった。その後、様々なテーマを設け年に2回の全教職員参加の研修を続けることにより、教職員が研修を受けることに慣れ、最初は効果を疑いながらも、業務内容を見直すことにより業務の適正化に結び付き、さらに生徒、保護者からの評価も高まるなどの好結果につながる事が多く、次第に改革へのアレルギーがなくなっていく。

平成15年、久しぶりに担任を命じられた。昨年までの担任が系列校への異動が決まり、その後を任されることになった。5年ぶりの担任で気持ちも新たに4月最初のホームルームを迎えた。クラスは3年11組、文理コース（この他に特進コース、スポーツコースがあった）の成績上位者を集めたクラスで、とにかく優しく素直な生徒が多く、クラス全体がよくまとまっていた。前任者の指導に感謝すると同時に、今後はどのように指導するのか迷ったが、3年生でもあり、生徒のほとんどが希望進路を定めていたので、私が生徒の時にお世話になったI先生の指導方法を参考にして、まずは、「生徒が自分で考え行動する力」を伸ばすことを第一にホームルーム経営計画を立てた。徹底して「答えは自分で出す」ことを生徒に求めた。最初は「どうしたらいいだろうか?」という問いが多かったが、その度に「どうしたいと思っているのか」と問い返すようにしていた。生徒たちは、最初は「不親切だ」、「やる気がない」などと言っていたが、答えを出すまで根気強く付き合っていたせいか、次第に質問が「こうしようと思うけどどうだろうか?」に変化してきた。夏休みが過ぎ、秋から冬へと時間が経過するにしたがって、クラスの生徒たちはよく学習に励み成績を向上させた。進学実績は上位の特進コースには及ばなかったが、多くの生徒が希望どおりの進路に進むことができた。卒業式後のホームルームでは皆が笑顔で、終礼後もいつまでも教室に残っていて、最後には無理やり帰宅させたことを思い出す。感染症が流行するまでは、このクラスの生徒は定期的集まっており、私もよく呼ばれ楽しいひと時を過ごしていた。先日も感染症が収まったら、集まるからそれまで健康でいるようにとのメールをもらい、明るい気持ちになった。

平成16年、教務部長に任命された。教務部長として、最初に取り組んだのが授業改善である。この頃の教職員の傾向として、生徒の生活面で生徒と真剣に向き合い、熱心に指導する教員は多いのだが、学習指導、進路指導に関しては、指導力が十分にあるという状態ではなく、生徒の成績向上が芳しくないのは、生徒自身が学習しないからであり仕方がないといった考えが蔓延していた。この状況を改善すべく、生徒による授業評価を取り入れ

ようと試みるも、賛成派と反対派に大きく分かれるような結果となり、改善には結びつかなかった。教員同士が互いの授業について遠慮なしに話ができて、授業の改善に結びつけることを目的にしていたのだが、一部の教員は自身の授業を生徒から評価されることに抵抗があり、期待していた効果には結びつかなかった。特にベテラン教員からの抵抗が強く、授業評価の継続は断念せざるを得なかった。

6. 管理職として

平成19年に教頭を命じられた。あまりに唐突で驚いた。45歳の時で、まだクラス担任や部活動顧問として身近で生徒とかかわっていたと思っていたところなので、正直、受けたくはなかったが、断れる雰囲気ではなく、受けるしかなかった。しかし、受けることになったからには、これまでとは違う結果を導けるようにしようと覚悟を決めた。平成22年までは教務部長を兼務することになり、教務部内の業務改善や教育課程の研究に時間をとられ、さらに施設改修計画にも携わるようになった。私学では公立校にはない独創的な教育や、その実践の場として施設の充実は重要である。この時は予算や補助金の関係もあり、先に施設改修・改善が進行した。平成22年から30年にかけて、グラウンドの全面人工芝化を皮切りに、授業をオープンにする目的での教室廊下間のパーティションの強化ガラス化、ICT教育に必要な校内wi-fiの整備、普通教室へのプロジェクター、スクリーンの設置、野球場の人工芝化、体育館の冷暖房化など、より良い教育環境の提供に努めた。

平成26年に副校長を命じられ、さらに平成28年に学園事務局次長、同29年、30年に学園事務局長として、学園全般の運営にも携わる機会を得た。ここでは私学経営の難しさ、学校現場と経営陣との間に入っている調整等、教育とは異なる分野での業務も経験することになった。労組との交渉も担当し、旧知の職員と向き合うことなど気の滅入る業務も多々あったが、何が正しいのかを常に考えながら、様々なことに挑戦すれば、その経験は必ず後に役立つものになることを知ることができた。

平成29年からは「授業診断」を取り入れることになった。これは外部の講師と教職員が授業を参観し、その後、講評会を実施して改善点を見つけ、その後の授業に生かすといった取り組みである。「授業診断」を取り入れている学校は全国に散らばっており、他校との比較をとおして、授業での強みを伸ばし、弱みを改善するために大いに役立っている。しかも、この講師の授業者個人の批判はしないという方針が功を奏し、最初は人事考課に利用されるのではと、警戒していた教職員が、次第に積極的に診断を受け、授業の改善に努めるようになった。特に若い教職員の場合、教科の枠を越えて同世代同士で競い合うように改善に努める姿が見られるようになった。また、教職員の研修を受ける様子を学校の広報活動で広く伝えることにより、中学生やその保護者からも好評を得るようになっていった。

平成31年（令和元年）には校長を命じられた。校長になることは全くの予想外であった

し、自分自身が動き回ることによって様々な業務に向き合ってきた。私には、校長は自らが動き回ってはいけないという考えがあったので、今度ばかりは受けるべきが大いに悩んだが、最後は理事長に押し切られた。よし悪しはあろうが、定年までの残り6年を自分が動き回る校長として走り切る覚悟を決めた。

今まで一緒に頑張ってきた仲間が管理職として周囲を固めてくれている。私が中堅教員の頃、新卒で入職してきた者が、部長・主任として後進の指導をしている。これだけ恵まれた環境で一緒に仕事ができることに感謝し、将来、社会貢献できる若者を育てることに力を注ぐことを決めた。

7. 私立学校の使命と現実

私立学校は、創立者が示した建学の精神をその教育内容に反映し、特色ある教育活動を実践している。中高一貫教育、グローバル教育、体験学習、帰国子女教育などのように私立での成果が制度として定着したものも多く、我が国の公教育全体の発展に寄与している。¹

東京学館高等学校の場合、創立者 鎌形 剛 先生は、「物質的な豊かさの中に発展した現代にあって、我が国の優れた伝統文化と心の豊かさを基盤とした社会の発展のために、開かれた世界の国際人として活躍奉仕できる有為な青年の育成」を建学の精神として、昭和54年に鎌形学園を創設された。44年前にグローバル教育の重要性を見出していたことは正に創立者の先見の明と言えるであろう。建学の精神に基づき、「自主・自学」が教育方針として創立以来受け継がれている。私は建学の精神、それに基づく教育方針は、その理念を大切にしながら時代に合わせた発展を意識し、指導目標を定め、具体的な教育活動を計画することが大切と考えている。平成29年に、今の時代に「自主・自学」を具現化するために、「協働力」・「発信力」・「思考力」・「先進力」・「メタ認知力」・「創造力」・「自律的行動力」を「7つのリソース」とし、これらを養成することを念頭におき、学校内における全ての教育活動を計画することを定めた。例えば、体育祭においては「創造力」、「自律的行動力」の養成を促すよう指導計画を作成するなどである。これにより、教育活動の目的が明確になり、教職員間での共有が以前より容易くなり、生徒への指導の統一性につながった。

特色ある教育を実践している私立学校の存在は重要であり、安定した存続が望まれる。しかし、少子化の影響で経営面での苦勞は多い。千葉県の私立高校は57校あるが、その半数の27校は定員を割っているのが現状である。経営が安定しなければ教育活動にも影響がでることになる。学校への補助金交付や生徒・保護者への就学支援金なども充実し、以前と比較すれば私立学校に通いやすくなっているが、トータルすれば私立学校に通う方が経済的負担は大きい。施設設備の充実は公立学校よりも優れているのに残念なことである。私学助成が更に充実することを願うと同時に、教職員一同が更に研鑽に励み、充実し

た教育活動を実践することにより優れた人材の育成を確実なものにしていくことを忘れてはならない。この努力があってこそ入学者増につながり、経営の安定化が図られ、理想とする教育実践に結びつき、将来社会貢献できる若者を育てることができる。私学に勤める者はこれを忘れてはならない。

また、この数年、学校創立時に新卒で入職した教職員の定年退職が続くため、若手の教職員の増加が著しい。職員室も明るい雰囲気になり活気も出てきた。この若い活力が学校を支える真の力へと変化していかなければならない。私の定年退職までの残りの時間はその変化を促すことに使いたい。

最近、教員の「働き方改革」という話題をよく目にする。教員の時間外勤務や休日勤務などが問題とされている。家族と過ごす時間がない、働き過ぎで身体を壊したなどは、あってはならないことなので改善の必要はあるが、全ての学校がそのような過酷な状況にあるわけではない。ここ数年、教職を志望する者が減少しているが、この労働問題がその原因の一つになっていることは否めない。教員は、将来を託す若者を育てるという重要な仕事である。多くの優秀な人材が積極的に教員を目指せるような環境が整うよう願う。また、私立学校は労基法が適用され一般企業と同じ扱いを受けるため、労使協定を結び、時間外勤務について明らかにした上で、1年単位の変形労働時間制を取り入れたり、業務内容を精査の上で時間外手当を支払ったりなどの対応をとっているところも多く、その労働環境は様々である。

8. 教職課程に学ぶ皆さんへ

私は、これまで出会った人から実に多くのことを学ぶことができた。中学・高校・大学の恩師、友人、就職してからの先輩や仲間、そして毎日接している生徒たちとその保護者のみなさんの一人ひとりが、私にとっての師だと思っている。教師が嫌いだった私が教師として生きていくことになったのも、教師となってからは、生徒の将来や学校の発展を考える際にも、これまで出会った人達と一緒に考え、行動した経験がその基礎にある。教職を目指す皆さんには、過去に出会った人からの教え、いま周囲にいる人との日常からの学び、将来を担う人への願いを大切に、自らの人間性を高め、将来を託す子供たちの人としての成長に尽力することを忘れずにいて欲しい。そしてこれが実践できれば、必ず大きな喜びや達成感を得ることができる素晴らしい職業になるはずである。

参考文献

- 1 全私学連合（2016年9月）「私立学校が果たしている役割」
日本私立中学高等学校連合会編「私立中学校・高等学校の現状と課題」